

ビジネス・ミーティングにおけるトピックの展開

——課題決定場面を中心とした韓日の違い——

李 志 暎*

Topic Development in a Business Meeting :

Differences between Koreans and Japanese in a Task Decision Scene

LEE Ji-Young

abstract

Based on a preceding study that a lot of patterns circulated throughout the development of a topic in a business meeting between Japanese, tending to put off a conclusion, this study provides a comparative analysis with a meeting between Koreans.

As a result, the big difference with J (Japanese) was scarcely observed to be about the number of patterns for all topics. However, a difference became clear for the process of a topic reaching a decision. As for J, the ratio of circulation topics emerged highly “before decision”, and for K (Koreans), “after decision”. This suggested that the process before decisions were made were different between the two groups.

In this way it is thought that the expectations of Koreans engaged in business towards making a decision rather than discussing related topics are different from that of Japanese. Thus, this may be another factor that contributes to the perception that “the Japanese do not give conclusions”.

Keywords : business meeting, task decision scene, circulation topics, before decision, after decision

1. はじめに

外国人ビジネス関係者にとって日本語母語話者の会議は「結論がなかなか出ない」ことから「非効率」であると指摘されている¹ (近藤 1998, 2002)。また、韓国語母語話者である筆者も、日本人との会議では案件の議論がなかなか進まないという印象をもっている。外国人ビジネス関係者が何故このように感じるのかその要因を把握することは、グローバル化の進行する現在、多様な文化背景を持つ人々が互いの言語行動を理解し、より良い人間関係を構築するのに役立つと思われる。そのためには、ビジネス関係者間のビジネス・ミーティング中のやりとりから言語行動パターンを詳細に探っていく必要があると考える。日本人によるビジネス・ミーティングでの会話が分析された先行研究では、その特徴として、トピックの循環が指摘され、これが結論を先延ばしにする要因であることが示唆されている (近藤 2002)。しかし、これはある一つの会議場面を分析した事例研究の結果であり、一般化するためにはより多くのデータを分析して検証する必要があるであろう。また、トピック循環がはたして日本人のビジネス・ミーティングにおいてだけ見られるものなのか、他の文化背景たとえば韓国人のビジ

キーワード：ビジネス・ミーティング、課題決定の場面、循環トピック、決定前、決定後

*平成12年度生 国際日本学専攻

ネス・ミーティングにおいても共通してみられるものなのかを対照してみることも必要であろう。そこで、本研究では、先行研究に基づき、課題を決定する場面において日本人と韓国人の間でどのようなトピックの展開の違いが見られるのかについて分析を行う。

2. 先行研究および本研究の位置づけ

ビジネス・ミーティングの会話を対象とした会話研究としては、まず、社内会議の場면을対象としたものとして、トピック管理ストラテジーの観点から日米対照をした Yamada (1989)、日本語の母語場面を取り上げ提案という言語行動を採った桑原 (1996,1998)、日米の接触場面において否定的な評価の発話に対する異なる解釈に注目して考察した Miller (2000) などがある。一方、会社間の会議場면을対象としたものとしては、トピックの観点から日本語の母語場面を分析した近藤 (2002)、日豪接触場面を取り上げ相手側の評価および解釈に焦点を当て文化間の規範の逸脱を採った Marriott (1995) などが見られる。

本研究は、これらの研究の中で、日本語母語場面の会議中の会話におけるトピックの循環を取り上げその特徴を探っている Yamada (1989) と近藤 (2002) を取り上げる。

Yamada (1989) は、銀行員の社内会議を分析した結果、トピックの展開について、アメリカ人は一つ一つのトピックが互いに完結し、展開していく線状型構造を示しているのに対し、日本人は一つ一つのトピックが明確に完結しないまま次へと展開する循環型構造を示していることを明らかにし、このような会議におけるトピック管理の仕方の違いから、両者が会議に参加する日米の接触場面においては衝突が起こる可能性を示唆した。では、同じアジア文化圏に属する韓日の接触場面の会議ではどうであろうか。かつて、世界の各言語の論理構造のパターンを比較した Kaplan (1972) は、結論に至るまでの展開構造がぐるぐる回る循環形をとる韓国語および中国語と、まっすぐ結論に至る直線型をとる英語を対照することで、中国語と韓国語を「オリエンタル」として一括りにできることを示した。このような点からは、日本語の会話のスタイルが韓国語や中国語にも見られることが予測されるが、実際の比較を通してその異同を検討する必要があるだろう。

一方、日本人の会議についてのアンケート調査により外国人ビジネス関係者が「日本人の会議では結論が出ない」として否定的な評価をしている (近藤 1998) ことに注目し、近藤 (2002) は課題の決定を目的とする日本人同士の会社間会議における循環トピックの割合を調べた。結果、会議全体を通して循環トピックの占める割合のことが検証された。このことから、近藤はトピックが循環し続けることで結論が出されるまでに長いやり取りが必要なことを指摘している。この近藤の研究を踏まえ、本研究では、事例を増やし他の例でも同様な現象が見られるのか探ることとする。分析の際には、まず、近藤 (2002) を踏襲して会議全体で見られるトピックが主に循環しているかどうかという特徴を分析した上で、次に、課題がトピックとして取り上げられ決定に至る場面 (以下、「課題決定の場面」) のみを取り出してトピックのパターンに特徴が見られるのについて分析を行う。なぜなら、会議において出現するたくさんのトピックには、それぞれ異なった目的が課されていると考えるからである。たとえば、あるトピックは案件を解決する目的を以って出されるであろうし、また別のトピックは新しい特定の情報を伝達する目的で、さらに別のトピックは、既にだされた情報を確認する目的で出されるであろう。その中で、なんらかの結論を出すという目的の下に出されていると解釈できるトピックだけに注目したほうが「結論がなかなか出ない」と言われていることの実態をより浮き彫りにできると考えるからである。

よって、本研究では、会議中の会話で出現する全トピックのパターンを調べた上で、課題が決定される場面に結論を出すことを目的として出されたトピックに焦点を当て、韓日の母語場면을対照し²、どのような異同が示されるのかを探ることを目的とする。

3. データ

分析データは、韓日の母語場面で行われた会社間のビジネス・ミーティングの会話である。データの概要を【表1】に示す。以下のデータは、筆者が立ち合いの許可を得た上で、ミーティング場面に立ち合いミーティングを録音 (データ K1, J1, J2, J3) したものと、会議の参加者に依頼して録音してもらったもの (データ K2, K3) である。

録音したものは全て文字起こしを行った。

これらの会議は少人数で行われる打ち合わせのような形式でもたれ、決定することが必要な案件があった。また、参加者は24名中3名が女性であり、参加者のほとんどは男性である。一方、年齢や職種は多様であった。こうしたデータの特性が影響を及ぼしていると考えられる点に注意して分析を行う。

【表1】ビジネス・ミーティングの内容

*は女性

NO (収録時期) 人数、 収録場所	参加者 (年齢)	ミーティング内容 (時間)
K1 (2003年) 4名 A社の事務室	A社建築設計士 (Ka41) T社工事監督 (Kb50代)(Kc60代) クライアント (Kd64)	工事中の建物の修正などについて (30分)
K2 (2004年) 3名 イベント社の事務室	ベンチャー会社 (Ke30代) イベント会社 (Kf30代)(Kg*20代)	ベンチャー会社で行うゲーム行事の全般の準備事項について (60分)
K3 (2006年) 4名 政府機関の会議室	政府機関 (Kh45)(Ki*35) デザイン会社 (Kj38) / システム開発会社 (Kk36)	最初の会議。政府機関のホームページのリニューアルについて (47分)
J1 (1999年) 3名 S社現場事務所	Y社建築設計士 (Ja37)(Jb25) S社の工事監督 (Jc32)	定例会議。工事中の建物の修正などについて (65分)
J2 (1999年) 4名 通信会社の会議室	通信会社 (Jd34)(Je30)(Jf28) 販売業者 (Jg37)	今後の契約内容の説明および機械のクレームの解決について (30分)
J3 (2001年) 6名 繊維協会の会議室	繊維会社 (Jh50代)(Ji*20代) 繊維協会 (Jj50代)(Jk40代)(Jl30代)(Jm30代)	Jhの会社で今後行うイベントに対する繊維協会のアドバイスについて (60分)

4. 分析の枠組み：トピック (topic)

「トピック」の定義に関しては、村上・熊取谷 (1995) を参考して「話し手と聞き手のやり取りからなる発話のひとまとまりの中で、言及の対象となっている、ある特定の事柄」(同上:101)とし、トピックのパターンを、「新出型」「派生型」「再生型」の3つに分ける(同上:103-104)。「新出型」は「新しいトピックで、先行トピックの中で全く言及されていなかったもの」であり、「派生型」は「先行トピックの中、関連する内容がトピックとして選ばれる」ものである。「再生型」は「それ以前に語られた内容が再度導入される場合」である。それぞれの例を以下にあげる。

01Jc	一番としー会議終わったあとできる／／のでー
02Jc	はい
<新出型> 03Jc	えー、2番のほうで、外壁タイルの見本焼き
04Jc	はい
05Jc	さっきちょっと見ていただきましたけど、けっこう今回はね [笑]、まともに(うん)焼いてきたなーというイメージがあるんですが、どうですかねー
06Jc	いいと思いますよ
07Jc	これで第1回目は／／大丈夫でー
08Ja	うんー、もう一回みてもらえば(えー) [4] いいじゃないですか
<派生型> 10Ja	だからこれが今度ー青にみえなくなりましたよね、しかもこうこうずっとみてたから
11Jc	あーこっちのイメージがー
12Ja	うんー
13Jc	あーそうですね
14Ja	こことこの間もいっきに出ましたよねー
15Jc	えー
16Jc	それはね、あの施袖ーをかけたものなんですよ
17Ja	んー
18Jc	えーこれが、えー地肌、あのー###ですよね↑
19Jc	ですから、この中間となるとー色合いがね、むずかしいんですよね###

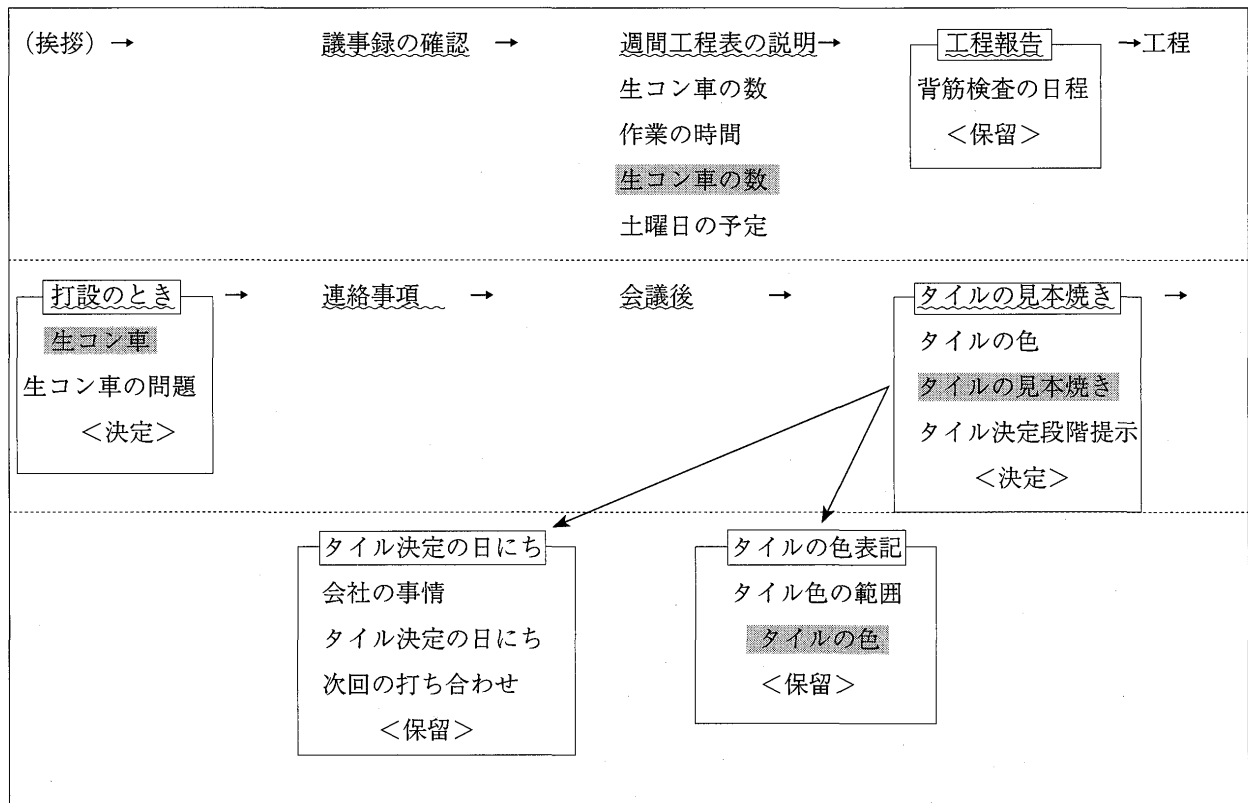
<再生型> 20 Jc 今回も各 50 枚ずつぐらい (はい) 焼いてますのでえーま、2つぐらいしぼっていただいて、
 21Ja うん
 22Jc 下板できたいよということであればあの一廊棟ほうのね↑、あの一廊下が／／－
 23Ja あー###
 24Jc ###が見ていただければね、見て (あー) いただければとも思うんですねー↑

上記の例は、データ J1 の設計士と工事監督の間でなされた会話である。

まず、「新出型」のトピックは、03 Jc 「えー、2 番のほうで、外壁タイルの見本焼き」のように、談話標示と共に、これからのトピックが述べられ、新しいトピックに変わることが提示されている。そのあと、10Ja で、「タイルの色」について述べられ、その前に話し合った「タイルの見本焼き」の関連したトピックが派生され、話が継続していることがわかる。あと、20Jc では、また「タイルの見本焼き」のトピックに戻り話が展開される。つまり、03Jc で新出型のトピックがここで再び見られたので、トピックが再生されているのがわかる。トピックの分類に関して本研究では、以上のように、分析を行った。

トピックの展開を捉えるには「線状構造」と「階層構造」という二つの立場がある (同上:106)。「線状構造」とは、「話順交替のシステムを基本として隣接対の連続から」(同上:107) 捉えるもので、隣接トピック間の関係は理解できるが、会話全体の構造を把握することは難しい。一方、「階層構造」は「複数の関連するトピックがより大きなトピックとしてまとまりを形成するもの」(同上:107) として捉えるので、全体的なトピックのまとまりが理解できる。

本研究では、会話に出現したトピックを調べるにあたって、特に「課題を決定する」目的で展開される会話を観察するには、トピックのまとまりを理解したほうが有効だと判断されることから、階層構造の立場から分析する。



*下線：新出型、網掛け：再生型、四角の部分：課題決定の場面

【図 1】会話のトピックの展開 (資料 J1)

上記の【図 1】はデータ J1 の冒頭部分である。ミーティングの会話は「議事録の確認」という新しいトピック (新出型) から始まり、次に「週間工程表の説明」という新しいトピックに移る。これに関する派生トピックの「生

コン車の数」「作業の時間」などがその後を続く。その後、「工程報告」という新しいトピックが提示されつつ「背筋検査の日程」の課題の解決のため参加者間で話し合いをしていく。【図1】で見られる大きめの実線の囲みは「課題決定の場面」であることを示す。「課題決定」とは、近藤（2002）を参考にし、本研究では「決定が必要な案件について、なんらかの形で決定³がなされること」を指す。上記の【図1】で示された「課題決定の場面」は、「工程報告」「打設のとき」「タイルの見本焼き」「タイル決定の日にち」「タイルの色表記」の5つである。5つの課題の中で、下線の3つの部分は新しいトピックで提示された課題であり、下線のない「タイル決定の日にち」「タイルの色表記」は先行トピックの「タイルの見本焼き」のトピックから派生された課題である。本研究ではこのように同じ課題であっても新出型であるか派生型であるかによってその展開は異なると予想されるので、分析においてその枠を別にする。

本研究では、会議中の会話におけるトピックを分析した後、「課題決定の場面」に絞りにさらに分析を行うが、ここで言う「課題決定の場面」とは、新出型のトピックとして課題が提示される「工程報告」「打設のとき」「タイルの焼き具合」がそれぞれ決定に至るまでの会話部分に当たるものを指す。例えば、「タイルの見本焼き」の新出型の課題は、決定まで「タイルの色」の派生型、「タイルの見本焼き」の再生型、「タイル決定段階提示」の派生型の展開のあと、決定に至るとして分析を行う。

5. 結果と考察

5.1 トピックのパターン

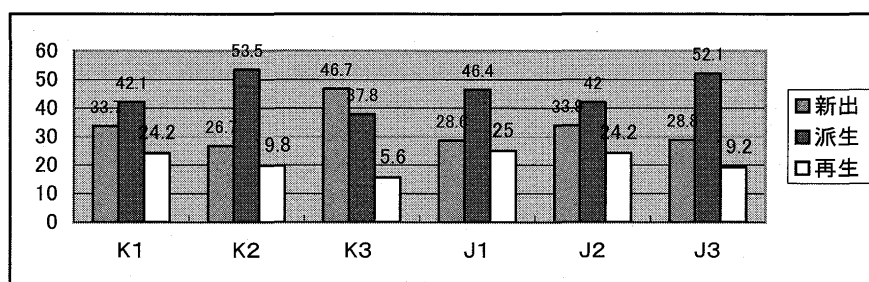
5.1.1 会話全体におけるトピックのパターン数

本データにおける会社間のミーティングは、一方の参加者が相手の参加者の会社に訪問して行われるものである。ミーティングとは、本題に入るまえになされるミーティングの趣旨説明やこれから取り上げられる案件の紹介から始まり、ミーティングの終了のメッセージが発話されるまでを指す。このミーティングの会話全体がどのようなトピックで構成されているのか。本データで見られたトピックのパターンについて、データ別に分析した結果、【表2】と【図2】のようにまとめられた。

【表2】 会話全体のトピックのパターン

() の単位：%

	新出型	派生型	再生型	計
K1	32 (33.7)	40 (42.1)	23 (24.2)	95 (100)
K2	23 (26.7)	46 (53.5)	17 (19.8)	86 (100)
K3	42 (46.7)	34 (37.8)	14 (15.6)	90 (100)
計 (K)	97 (35.6)	120 (44.3)	54 (20.0)	271 (100)
J1	40 (28.6)	65 (46.4)	35 (25.0)	140 (100)
J2	21 (33.9)	26 (42.0)	15 (24.2)	62 (100)
J3	21 (28.8)	38 (52.1)	14 (19.2)	73 (100)
計 (J)	82 (29.8)	129 (47.0)	64 (23.3)	275 (100)



【図2】 会話全体のトピックのパターン

データ別に分析した結果、K3を除くと、KもJも同様に「派生型」がもっとも多く、「派生型>新出型>再生型」の順でトピックが提示されていた。「新出型」がもっとも多く見られたK3は、政府機関に属する一人の参加者が一方的に話を進展するという傾向があり、非常に堅苦しい雰囲気もあった。この影響を受けた結果ではないかと考えられる。

結果を全体的にみると、Kでは僅かではあるが「新出型」のほうが(K35.6%、J29.8%)、Jでは「派生型」(K44.3%、J47.0%)や「再生型」(K20.0%、J23.3%)のほうが多くみられたことから、日本語の母語場面で循環されるトピックが多数表れたといえる。しかしKとの間に大きな差は示されなかったといえる。

近藤(2002)によると、30分間の日本語母語場面の会議における総トピック数73の内訳として、新出型33(45%)、派生型25(34%)、再生型15(21%)が見られ、「派生型」と「再生型」の循環されたトピックが55%という高い割合を示していたことを指摘している。本研究でも「派生型」と「再生型」との割合(70%)が高く、近藤の結果を支持するものであった。ただし、このような循環トピックの高い割合は日本語場面だけに見られる特徴ではなく、韓国語母語場面でも同様の結果が得られたという点が注目される。

このように、循環トピックが多数見られた原因としては、会社間会議という場面性にあるのではないかと考えられる。つまり、会社間会議は、社内会議よりも、与えられた案件について慎重に検討しなければならないことが多く、その分関連した複数のトピックが表れるのではないだろうか。本データの場合、30代が中心となっているベンチャー会社から40代から60代までが参加する中堅企業など、各データの性格は一致していないが、会議全体のトピックのパターンにはあまり偏りが見られなかった。このことから、会社間の会議という場面では、循環トピックが多いという特徴があると考えられる。

以上会議全体において取り上げられた循環トピックの数においては韓日に差がないことから、日本語母語場面の会議で「結論がなかなか出ない」ことの要因として、会議全体における循環トピックを対象にその多さに求めることには無理があることが分かる。そこで、本研究では、会議全体ではなくて、会議の中でも課題決定に関連したトピックのみを取り出し、同様に分析を行い、そこにおける韓日の違いを見ることにした。

5.1.2 課題決定の場面におけるトピックのパターン数

日本語母語場面の会議は「結論がなかなか出ない」と言われているのであれば、結論に向かってやりとりが行われる場面(「課題決定の場面」)に着目してさらに分析を行う必要がある。ここでは、会議全体の中で、課題を決定するために話し合う場面のみを取り出し、そこでのトピックの展開がどのように構成されているのかについて観察した。

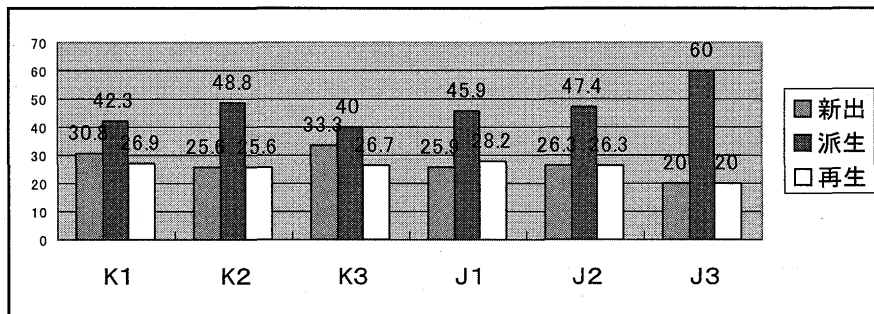
ただし、「課題決定の場面」といってもその課題が新しいトピックとして提示され話が進む場合と、派生されたトピックとして提示される場合との会話の展開は異なることが予想される。つまり、課題が決定されるまでのプロセスは与えられた課題が参加者間でどれくらい進展した会話の過程で提示されたかによって決定に至るまでのトピックの数や時間の差は異なると考えられるからである。たとえば、前述した【図1】でも示したように、「タイルの見本焼き」のような新出型のトピックで提示された課題が決定に至るまでのプロセスは、派生型の「タイルの色表記」の課題の決定に至るまでのプロセスとは異なると判断したのである。

「派生型」や「再生型」で提示された課題は、参加者間でどれくらい進展した状態でトピックが再び提示されたのか、それぞれ異なるであろう。よって、その基準が一定していないと思われるので、本研究では、新出型として課題が与えられている場面を分析対象とする。新出型の場合は本データに限るとその基準が一定しており、また、その出現回数も最も多いのである。

分析結果を【表3】と【図3】としてまとめた。

【表3】 新出型の課題が決定に至るまでのトピックのパターン ()の単位：%

課題決定の会話例	新出型	派生型	再生型	計
K1 (14 例)	16 (30.8)	22 (42.3)	14 (26.9)	52 (100)
K2 (10 例)	11 (25.6)	21 (48.8)	11 (25.6)	43 (100)
K3 (4 例)	5 (33.3)	6 (40.0)	4 (26.7)	15 (100)
計 (K : 28 例)	32 (29.1)	49 (44.5)	29 (26.4)	110 (100)
J1 (21 例)	22 (25.9)	39 (45.9)	24 (28.2)	85 (100)
J2 (3 例)	5 (26.3)	9 (47.4)	5 (26.3)	19 (100)
J3 (2 例)	2 (20.0)	6 (60.0)	2 (20.0)	10 (100)
計 (J : 26 例)	29 (25.4)	54 (47.4)	31 (27.2)	114 (100)



【図3】 新出型の課題が決定される場面でのトピックの分布

分析された新出型トピックの課題決定場面での会話例は、Kが28例、Jが26例見られた。全体的には「派生型」がもっとも高い数値を見せていたが、その次は、Kでは「新出型」が、Jでは「再生型」のほうが多く見られた。つまり、全体的なトピックの順は、Kが「派生型>新出型≥再生型」であり、Jが「派生型>再生型≥新出型」を示し、「新出型」はKのほうが、「派生型」と「再生型」の循環トピックはJのほうが若干上回っているが大きな差は示されなかった。

データ中、K3の場合、前述した5.1.1では「新出型」がもっとも多く見られたが、課題が決定される場面では「派生型」のほうがより多く見られた。このような傾向は他のデータでも見られ、「新出型」は5.1.1で見られた数より少なく示された反面、「再生型」のトピックはより多く見出されている。その原因を考えると、会社間会議で「課題決定」ということは、利潤にかかわる行為であることが多いだけに、慎重な姿勢で対処しなければならないため、課題に関して参加者間で充分話し合われるようになるだろうと推測できる。つまり、先行発話の内容に関連してやりとりが行ったり、再び確認したりすることは充分あり得ると考えられるからである。

以上、循環トピックの「派生型」や「再生型」の数は、前述の5.1.1での会議全体においても、ここで取り上げた課題決定場面に限ってみても、KとJとの間に大きな違いは見られなかった。ゆえに、トピックの循環の多さが、韓国人ビジネス関係者にとって日本語母語話者の会議を「結論が出ない」と感じさせる要因として考えることは難しいことが追認されたといえる。したがって、他の観点からの分析を要する。そこで観点を換え「課題決定の場面」の中で、「決定」が行われるまでのプロセス自体に着目して分析を行うことにした。

5.2 トピックの展開と決定との関係

5.2.1 決定前後のトピックの展開

全体的な分析結果の提示に先だって、具体例を見てみよう。次の例1)は韓国人同士のデータK1からのものであり、例2)は日本人同士のデータJ1からのものである。両方とも新しい課題が提示され、該当課題のトピックが終わるまでである(点線の間)。文脈の理解のため、その前後の会話も載せた。

例1) K1「集水井（トレンチ）の設置」を決定する場面

463Kd	그럼 땅이 죽은 땅이지 어떻게 보면 .{1} 수요가 // 없는 もちろん、死んじゃった土地だね、ある意味では {1} 需要の // ない
新 464Kb	우리 그리고, 참 여기 오일탱크— 내부에 있잖아요— うちの、それから、そうだ、こっちオイルタンク—、内部にですね—。
465 Ka	네·はい
466 Kb	트렌치설치 해야 됩니까? 트렌치設置しなければならぬんですか。
467Ka	그거 하셔야죠. それしなければならぬですよ。
468 Kb	해야 되겠죠? 오일탱크도 잉? そうですね? オイルタンクも、ね?
469Ka	네·はい
派 470 Kd	트렌치가 뭐야. 트렌치ってなに?
471 Kb	우리 건축용어요. 기름이 섰다, 그럼 가에로 흘러 한쪽에 모아지는 홈을 이렇게 파는거. 집수정 建築用語ですよ、油が漏れたとき、片方に流れるように溝をこんなに掘るやつ、集水井
再 472Ka	그거 집수정이 있어야지. それ、集水井なければならぬ
473 Kb	음— 집수정을 만들 // 어야지 우—ん、集水井作らなければ // ならぬ
	<中略>
派 476Kb	근데 문제는— 이런거 만들기가 겁나는 것이 뭐냐 하며는—, 암반이 받치니까— 더 밑으로 파내려갈 수 없을때. ところで、問題は、こんなの怖いのがなにかと言うと、岩盤にかかって下を掘り 下げることができない場合、
	<中略>
再 486L	그나저나 물이 나오면 근본해결은 되구만?とにかく水が出るとしたら根本的な
487 皆 예	— はい 問題は解決されるよね?
488L	걱정되더구만, 약간은. 心配だったのよ、若干は、
489K2	역수예요. 완전히 바위수 암반의, 100 미터 넘어서도 나오 // 니까 — 逆水なんですよ、完全に、岩水、岩盤の 100メートル以下からでも出る / から—
490L	그럼 그럼. そうそう
新 491S	그 다음에 언제쯤— 물파고 언제쯤 포크레일해가지고 작업 들어가시는 거예요? 次は、いつ ぐらい—水を掘り、いつ頃掘削機で作業始めるのですか。

* 網掛け部分：決定が行われる場面、**新**は「新出型」、**派**は「派生型」、**再**は「再生型」

上記の例1)は、現在工事中である建物の「集水井」の設置に関する課題が出され、その決定のため話し合われる場面である。工事監督464Kbは「それから、そうだ」の発話で瞬間的に思い出した内容を取り上げ新しいトピックを提示し、466 Kbでは「トレンチ（集水井）の設置」に関する課題を出している。それに対し設計士の467Kaは「設置すべき」という同意応答を表し、468 Kb～469Kaの発話にかけて内容の確認を行い、参加者間で「トレンチ設置」に決定することで合意したと考えられる。

課題のトピックである「トレンチ設置」についてのやり取りはここで終わらず、以後複数のトピック（派生型、再生型）がつついていることがわかる。

例2) J1:「管理室の盤の位置」を決定する場面

615Jc	はい、[小声]え一点検工事###ですねー[/小]{7}
新616Jc	あと、えーこちらの管理しーつーの//盤
617Ja	はい
618Jc	これもこういう位置で考えておりますけどー
619Ja	はい
620Jc	特に、しょうはないと、思い//ますー
621Ja	[ゆっくり][小声]しょうはないと、##管理室の物をおくスペースこう想定しているんですけど[/ゆ]、関係ないかー[/小]ま、いいんじゃないですか
622Jc	よろしいですか
623Ja	うーん
派624Ja	ただ、えーうまく並べたほうが見栄えが、いいような気がするんだけど、ここには、要は、この耐力壁中に配管が入らないということなのかなー↑そうすることであればそうですねー
625Jc	えー、基本的に外壁の一、中に、あの、{笑}配管は(ん)しちゃいけないという基準――
626Ja	あ――
627Jc	え――
派628Ja	そうすると、こっちもそうなんじゃない
629Jc	え//ー
630Ja	これ、下からこうー
631Jc	こ、これは、あの、こちらから持ってきてるんですよー
632Ja	おー
再633Jc	で、ま、抜くところは、ま、どこかしぼってねー
634Ja	んー
635Jc	あの、出し入れはするんですけども(はい)えー中をずーと、CD管や、そういった物が通るのはよくないですよ、
636Ja	んー
637Jc	外壁について
638Ja	はい
639Jc	え、そういうところありますので
640Ja	はい
再641Ja	ま、あと他の盤との関係が、なければ、いいと思いますよ
642Jc	え、それは、えー、また設備のほうと調整してますので、
643Ja	はい
644Jc	問題ないと思います
645Ja	はい {2}
646Jc	はい、では
647Ja	はい {10}
648Ja	次に、あのーピットのなかに、コンセントが一、(はい)あるんですけどもー

上記の例2)は、データJ1からのもので、工事作業の内容中、「管理室の盤の位置」に関して決定が行われる場面である。この「盤の位置」についての新しいトピックは616Jcの発話の「あと」の談話表示と共に始まっており、工事監督618Jcは「こういう位置で考えている」と述べ、盤の位置について提案している。それに対し設計士621Jaは同意するような応答を示したが、622Jc～623Jaの確認の段階で合意に至らず、以後、複数のトピックがつづく。決定が示される場所は、最後のところの641Ja～645Jaにかけて行われている。

以上、例1)と例2)から見られたように、「決定」までのトピックのプロセスには違いが窺える。まず、一つは、決定がいつ行われていたかという点である。Kの例1)では、課題が提示された後、時間があまり経たないうちに行われているのに対し、Jの例2)では数分間あとで行われており、同時に課題のトピックもそれ以上進展せずそこで締めくくられている。もう一つは、どこに関連トピックが主に占められているのかについての点である。Kの例1)では決定後に、Jの例2)では決定前に複数のトピックが展開されていることがわかる。たとえば、課題を解決するのに起こりうる問題点などについて語られるところが決定前後に分かれていることは興味深い(例1の476Kb「ところで、問題は〜」)。

はなして他の会話例でも同じ傾向が見られるのだろうか。「課題決定の場面」で決定までのトピックの数(決定前)とそれ以後のトピックの数(決定後)を【表4】でまとめてみた。

【表4】 決定前後におけるトピックのパターン

()の単位：%

	決定前			決定後			計 (100%)	
	新出	派生	再生	新出	派生	再生	決定前	決定後
K1/14 例	15 (288)	11 (212)	3 (58)	1 (19)	11 (212)	11 (212)	29 (558)	23 (442)
K2/10 例	11 (256)	8 (186)	8 (186)	0 (00)	13 (302)	3 (70)	27 (628)	16 (372)
K3/4 例	4 (267)	6 (400)	3 (200)	1 (67)	0 (00)	1 (67)	13 (867)	2 (133)
計 (K)	30 (273)	25 (223)	14 (127)	2 (18)	24 (218)	15 (136)	69 (627)	41 (373)
J1/21 例	21 (247)	36 (424)	13 (153)	1 (12)	3 (35)	11 (129)	70 (824)	15 (176)
J2/3 例	5 (263)	5 (263)	4 (211)	0 (00)	4 (211)	1 (53)	14 (737)	5 (263)
J3/2 例	2 (200)	5 (500)	2 (200)	0 (00)	1 (100)	0 (00)	9 (900)	1 (100)
計 (J)	28 (246)	46 (404)	19 (167)	1 (09)	8 (70)	12 (105)	93 (816)	21 (184)

【表4】から、まず、「決定前」の場合、Kで示されたトピックの数は「新出型>派生型>再生型」の順であり、Jは「派生型>新出型>再生型」の順で異なる傾向を見せた。「新出型」はKとJでは30%弱見られているが、Kではこれより数少ない「派生型」や「再生型」が示されているのに対し、JではKより2倍弱の「派生型」や、Kより数多い「再生型」のトピックが見られた。この結果から、決定が行われるまでは、JのほうがKより課題に関連した内容について参加者間で充分話し合っているのではないかと推測できる。

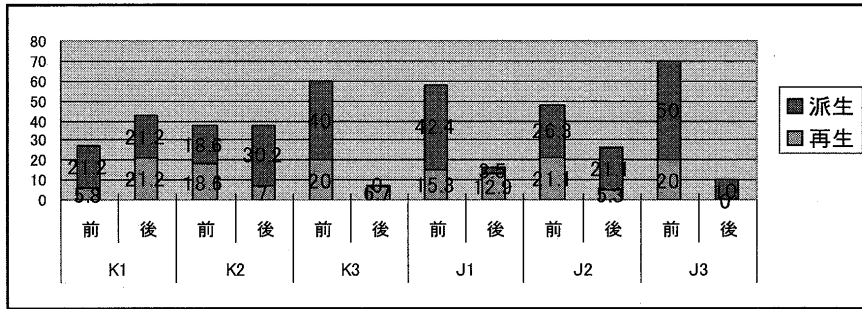
一方、「決定後」の場合、もっとも大きな差は「派生型」の出現である。つまり、Kの場合は、決定前の派生型の出現数とあまり変わらない(決定前22.3%、決定後21.8%)ことを示しているのに対し、Jではわずか(7.0%)しか示されていない。ということは、Kは決定が行われた後でも課題に関連した内容で参加者間話し合うことが多いということであろう。どういう話が行われているのかに関してはよりミクロ的に見る必要があると思うので、それは今後の課題にしたいと思われる。

以上、決定前後に表れるトピックの出現にはKとJとの違いが見られ、決定前にはJのほうが、決定後にはKのほうにトピックの出現が多いことが分かった。

5.2.2 決定前後における循環トピック

決定前後によってトピックの出現が異なったKとJの違いの中でも、「派生型」や「再生型」のように循環されるトピックに特徴が見られたので、ここでは、循環トピックのみを取り出して比較検討してみた。

以下、【図4】は、データ別に見られた決定前後における循環トピック(派生型、再生型)の分布を示したものである。

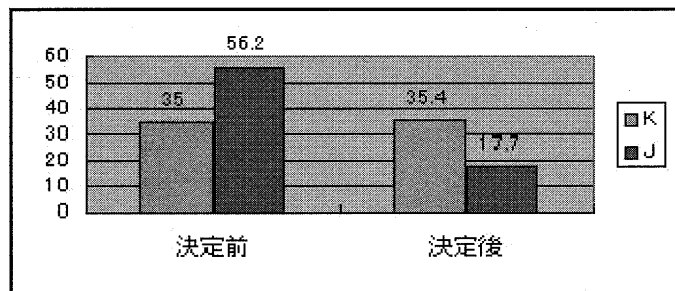


数字の単位：%

【図4】 課題決定場面における循環トピックの分布⁴

上記の【図4】をみると、Jでは決定前のほうがはるかに数多くの循環トピックの出現が見られるのに対し、Kでは決定前後に出現された循環トピックの割合にはばらつきが見られた。K1は決定後のほうに、K2は決定前後が同様に、K3はJと同じく決定前のほうが多く見られた。特に、K3のデータは、会議進行者が会議を一方的に進めていくという特徴から示された結果として考えると、K1とK2の結果から、韓国語母語話者の会議では決定後にも課題に関して話合われる傾向があるということが示唆できるのではないかとと思われる。それに対してJでは、決定前には課題に関連して話し合うけれど、決定後には課題に関連したトピックを取り上げることはない傾向を示唆していると思われる。

全体的に決定前後に循環トピックがどのように出現されているのかを、より単純化してみると次の【図5】のように示すことができるだろう。以下の数値は、「派生型」と「再生型」の割合を合計したものである。



数字の単位：%

【図5】 決定前後における循環トピック（派生型+再生型）

循環トピックの出現数を決定前後にして示してみたら、Kでは「決定前」と「決定後」にはあまり変わらないことを示していたが（決定前35.0%、決定後35.4%）、Jでは、決定前のほうが多く見られた（決定前56.2%、決定後17.7%）。

つまり、「決定前」にはJのほうに、「決定後」にはKのほうに循環トピックが多くみられ、その出現に違いが明らかにことなっていた。

このような結果から、前述した例1)と例2)のようなパターンが他の会話例でも同様の傾向を示していることがわかった。つまり、Kは、新しいトピックの課題が提示された後、その冒頭部分で決定が行われており、それ以降でも関連するトピックが続くことが多く見られた。一方、Jは、決定前には関連のトピックで十分に話し合われ、決定後は新たにトピックをあまり設定せず、決定された内容について参加者間で再び確認する傾向が多く見られた。

このような点から、KとJの大きな違いは、会話全体における循環トピックの数ではなく、決定までのプロセスにあることが本研究を通して明らかになった。つまり、「決定」が行われるまでの循環トピックのプロセスにおいてどのようなパターンが優先されるのかについて、KとJの違いが見られたのである。

以上の結果により、韓国人にとって「日本人はなかなか結論を出さない」と感じさせる要因の一つとして、決定までのプロセスにおいてどういトピックの展開が優先されているのかについて、その期待されるところが異なる点にあると考えられるだろう。

なお、話が循環される点について見た場合、決定の内容が「次回の打ち合わせにしよう」のように保留されるところに注目したい。KとJから見られた数を見ると、Kは決定場面の34例中2例(5.9%)のみで、ほとんど課題を遂行するか却下するかという結論を出している。一方、Jの場合は課題決定の場面の総37例中8例(21.6%)が保留の決定が行われた。このように保留された課題は次回のミーティングで再び取り上げられるだろうし、もしミーティングを縦断的に追っていくと、Jのほうがトピックを循環させることでより高い割合を示す可能性はあると考えられる。したがって、取り上げられた課題がその場で具体的な解決案として出されていないという点も、韓国人にとっては会議を非効率に感じさせる一つの要因として考えられるのではないと思われる。

6. まとめ及び今後の課題

日本語母語話者のビジネス・ミーティングにおいてトピックの展開には循環されるパターンが多く結論を先延ばしにする傾向があると示唆している先行研究(近藤2002)に基づき、本研究では韓国語母語話者との比較分析を行った。その結果、まず、会話全体や課題決定の場面における全トピックのパターンの数についてはKとJとの大きな違いは見られなかった。しかし、決定までのトピックのプロセスには違いが明らかになった。「決定前」はJのほうに、「決定後」にはKのほうに循環トピックの割合が高く表れ、決定が行われるまでのプロセスが異なることを示唆していた。また、課題の決定が保留されることによってその場で決定が行われていないこともKとJの違いとして窺えた。

このように、関連するトピックについてまず充分話し合うことよりも、決定すること自体を優先する韓国人ビジネス関係者は、結論を出すことの期待感において、日本語母語話者とは異なっていると考えられる。ゆえに、このような点が、日本語母語話者は「結論を出さない」と感じられる一つの要因であると考えられる。今後は、その要因を綿密に探るために、発話機能のような、よりミクロ的な観点からの研究が必要である。

註

1. 近藤(1998)のアンケート調査対象者100名中、アジア圏が(中国36%・韓国13%)49%、欧米豪系が51%から得られた結果である。国別の結果を出してはいないが、「日本人の会議は非効率である」という点は支障の要因として高い因子になっている。
2. 韓日対照を行う理由は、韓国人母語話者である筆者の直感および近藤(1998)のアンケート調査でも示されたように、韓国人ビジネス関係者にとって、日本人の会議は「結論がなかなか出ない」と感じられる可能性ある。その要因の一つとして「トピックが循環される」点が示唆されているけれど、それは、日本人のミーティングのみ分析、または、英語との比較の結果で、日本語と統語的に同じである韓国語も、同様に言えるかどうかに関しは、韓国人のミーティングと比較分析してからこそ言えるのではないと思われる。
3. 「なんらかの決定」とは、提示された課題の内容を遂行または却下することだけでなく、「次回の会議にしよう」のような保留も含む。
4. 前述の【表4】中、「派生型」と「再生型」の結果を取り出してグラフ化したものである。グラフ内の「前」は「決定前」、「後」は「決定後」の意。

<参考文献>

- 桑原和子(1996)「日本語の「提案」の談話の構造分析」『日本女子大学大学院文学研究科紀要』2輯, 1-11.
- 桑原和子(1998)「会議の提案の談話における「話段」の展開とストラテジー」『国文目白』37号, 日本女子大学国語国文学会編, 33-43.
- 近藤彩(1998)「ビジネス上の接触場面における問題点に関する研究—外国人ビジネス関係者を対象にして—」『日本語教育』98号, 97-108.
- 近藤彩(2002)『日本人と外国人とのビジネス上の問題点に関する実証研究—新しい「日本語によるビジネス・コミュニケーション」の構築に向けて—」お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士論文
- 村上恵・熊取谷哲夫(1995)「談話トピックの結束性と展開構造」、『表現研究』62, 表現学会, pp.101-111

- Kaplan, Robert B (1972) *The Anatomy of Rhetoric; Prolegomena to a Functional Theory of Rhetoric*. Philadelphia, PA: The Center for Curriculum Development, Inc
- Marriott, H. (1995) The management of discourse in international seller-buyer negotiations, In Konrad Ehlich, Johannes Wagner. (Eds.) *The discourse of business negotiation*. Great Berlin: NY: Mouton de Gruyter, 103-126.
- Miller, L. (2000) Negative assessments in Japanese-American workplace interaction, In Spencer-Oatey, H (Eds.) *Culturally speaking* : CONTINUUM, 240-254.
- Yamada, H. (1989) American and Japanese topic management strategies in business meetings. Georgetown University : Ph.D. dissertation.

(2007年1月12日受理)